



インフォメーション

第25回高分子分析討論会報告

2020年11月5日(木)、6日(金)に高分子分析研究懇談会主催の第25回高分子分析討論会が開催された。当初は名古屋国際会議場でポスター発表を中心に行う予定であったが、他の学会活動の例にもれず新型コロナ感染の影響を受けて、オンラインでの口頭発表へと変更することとなった。オンラインは二会場(二回線)設置し、2日間にわたり、55件の研究発表が行われた。参加者数は259名であり、初めての形式での試みにもかかわらず多くの方にご参加いただいた。また、協賛企業は14社を数え、両日にわたりテクニカルレビュー、オンライン展示会、ホームページ上の広告掲載を行った。途中、通信トラブルがいくつか発生し、実行委員があたふたする場面もあったが、全体としてはプログラムを予定通り終了することができた。

初日午前中は、平野朋広(徳島大学)実行委員長の挨拶による開会の後、オンラインA会場、B会場での研究発表が行われた。初日午後には特別講演として、大阪市立大学の坪井泰之先生より「レーザーピンセットを駆使する高分子水溶液の顕微分光分析」と題して、自作した「集光レーザー型光ピンセット・共焦点顕微ラマン/蛍光分光装置」の説明や応用に関してご講演いただいた。続いて、A・B会場に分れ、午後の研究発表が行われた。

二日目もA・B会場に分れた午前と午後の研究発表と、午後には特別講演として、名古屋工業大学の谷本肇先生より「特異な分解反応を利用する不溶性架橋高分子の三次元ネットワーク構造解析」と題して、反応熱分解GC-MSおよび超臨界メタノール分解-MALLDI-MS測定による架橋構造を解明する手法をご講演いただいた。架橋高分子を分解させることにより、架橋ネットワーク構造を反映する生成物を得て、それぞれ応じた分析解析を用いることで構造解析が可能となることを具体的な例を用いて詳細に解説いただいた。

一般の研究発表は質疑応答を含めて20分とし、合成高分子や天然高分子などを対象に、構造、反応、劣化などの解析および解析技術に関する多岐にわたる内容であった。また、近年世界的に問題となっているマイクロプラスチックの解析事例なども発表された。参加者によるオンライン投票を実施し、優秀発表賞として3件が選出された。受賞した演題と演者を以下に

記す。

「プランクトン1個体に摂食されたマイクロプラスチックの熱分解GC/MSによる定量分析」中野里咲(名工大院)

「熱脱着・熱分解DART-MSを用いたポリフェニレンスルフィドの末端構造解析」山根祥吾(産総研機能化学)

「反応熱分解GC-MSによる強固な架橋構造を有する紫外線硬化アクリレート共重合体の組成及び構造解析」加藤章太郎(名工大院)

来年度は、10月28日(木)・29日(金)の2日間にわたり茨城県つくば市のつくば国際会議場にて第26回高分子分析討論会を開催する予定です。今年は感染対策のためやむなくオンラインでの開催となりましたが、やはり対面での議論や討論のよさは得られません。1年後は新型コロナウイルス感染問題が終息し、参加者同士が会合できることを切に願っています。

最後に、本会の開催にあたり、企業協賛いただいたi-NEAT(株)、アジレント・テクノロジー(株)、インフォコム(株)、(株)エス・ティ・ジャパン、スペクトラ・フォーラム、東ソー(株)、日本ウォーターズ(株)、日本電子(株)、日本分析工業(株)、ネッチ・ジャパン(株)、浜松ホトニクス(株)、ブルカー・ジャパン(株)、フロンティア・ラボ(株)、LECOジャパン合同会社、の各社に深く感謝いたします。

(ニチアス(株) 橋本知美)

第34回分析化学における不確かさ 研修プログラム

2020年11月5日(木)、6日(金)の2日間、日本電気計器検定所本社(東京都港区)において開催した第34回分析化学における不確かさ研修プログラムについて、ご報告します。

本セミナーは、公益社団法人日本分析化学会様と共同開催しているもので、一般財団法人化学物質評価研究機構様からも講師をお招きしています。講師は何れもセミナーの開発段階から関わっており、既にこのセミナーの講師を10年、30回以上にわたり務めているベテランです。

セミナーは偏微分や難しい数式は使わずに、不確かさ評価の概要、確率分布、標準不確かさ、合成標準不確かさ、拡張不確かさ、不確かさの要因の説明・演習を行い、実際の不確かさ評



価の事例もご紹介しします。講義と演習を交互に繰り返しつつ、きちんと段階を踏み徐々にレベルを上げていくので、知らず知らずの内に、確実に不確かさの計算ができるようになります。

セミナー後のアンケートでは、「講師が一人一人、進捗を確認しながら進めてくれたので置いていかれる心配がなくて良かった」、「グループ演習で、他の会社の方の視点が異なる意見を聞いて非常に参考になった」などの感想をいただきました。

今回のセミナーは、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、定員を減らして席を通常の2倍の間隔とし、飛沫拡散防止パーテーション設置、会場に加えエレベータや手を触れる箇所の消毒、小まめな換気のほか、受講者の皆様にも、入室前の体温測定や会場でのマスク着用等のご協力を戴いた上で開催しました。

このような状況下ではありましたが、セミナーには北海道から沖縄まで、15名のお客様にご参加戴き、講師も自然と力が入ったようです。

今後も、「楽しく・簡単に・解かり易く」を心がけ、受講者の皆様にご満足いただけるよう、努めて参ります。

次回、第35回目の開催は、2021年2月9日（火）、10日（水）の2日間を予定しています。セミナーは、皆様に安心してご参加戴けるよう、コロナ対策をとりつつ開催します。開催情報の詳細は、「ぶんせき」のお知らせ欄及びホームページ（日本分析化学会様 <https://www.jsac.jp/>、日本電気計器検定所 <https://www.jemic.go.jp/>）に掲載しますので、ご覧ください。

〔セミナー事務局・日本電気計器検定所 長谷川幸子〕



2021年の表紙デザインについて

本年の表紙デザインは以下のとおりです。制作者から寄稿いただいた文面もあわせて掲載いたします。

表題「時の流れに時を刻む」

原案製作：千葉大学 田中佑樹

新型コロナウイルスという未曾有の感染症と人類の戦いが2020年に刻まれました。かつての日常は、かけがえのない時間であったと気付かされた方も多いことでしょう。年が明けても、決してリセットされることのない、この時間のルールに乗って、2021年が終わるころには、我々はどのような世界に到達しているのでしょうか。

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（「方丈記」鴨長明）。何もしなくても、時は流れ、良くも悪くも状況は変化していきます。自粛の果てに収束があるかもしれません。しかし、我々科学者は時計の針を自ら進め、科学を発展させることで、困難な局面に立ち向かって行かなければいけません。そんな思いを込めて表紙を描かせて頂きました。

2021年も皆さんと共に分析化学の時計の針を進めていけるよう、魅力ある「ぶんせき」をお届けします。

〔「ぶんせき」編集委員会〕

執筆者のプロフィール

（とびら）

金澤秀子 (Hideko KANAZAWA)

慶應義塾大学薬学部（〒105-8512 東京都港区芝公園1-5-30）。共立薬科大学大学院博士後期課程修了。博士（薬学）。《現在の研究テーマ》機能性高分子の分子設計と分離システムおよびDDSへの応用。

（ミニファイル）

山元 恵 (Megumi YAMAMOTO)

環境省国立水俣病総合研究センター環境・保健研究部（〒867-0008 熊本県水俣市浜4058-18）。

E-mail : yamamoto@nimd.go.jp

丸本幸治 (Kohji MARUMOTO)

環境省国立水俣病総合研究センター環境・保健研究部（〒867-0008 熊本県水俣市浜4058-18）。

（トビックス）

杉山恭子 (Kyoko SUGIYAMA)

東北医科薬科大学薬学部（〒981-8558 宮城県仙台市青葉区小松島4-4-1）。東北大学大学院薬学研究科修士修了。修士（薬学）。

E-mail : kyoko.sugiyama@tohoku-mpu.ac.jp

下赤卓史 (Takafumi SHIMOAKA)

京都大学化学研究所（〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄）。広島大学大学院理学研究科化学専攻博士課程後期。博士（理学）。《現在の研究テーマ》振動分光法による機能性材料の

物性と分子集合構造の関係の解明。《趣味》

野球（カーブ）観戦、歴史博物館めぐり。

E-mail : shimoaka@scl.kyoto-u.ac.jp

（リレーエッセイ）

三宅司郎 (Shiro MIYAKE)

麻布大学生命・環境科学部（〒252-5201 神奈川県相模原市中央区淵野辺1-17-71）。北海道大学水産学部。博士（医学）。《現在の研究テーマ》食品衛生上の危害要因（カビ毒、農薬、細菌）迅速検査方法の開発。《主な著書》“イラストで見る HACCP システムの要点”（幸書房）。《趣味》山歩き、自然観察、読書。

E-mail : s-miyake@azabu-u.ac.jp